

## 第7回文化・教育委員会議事録

1. 開催日時:平成31年3月19日(火)9時30分～11時30分
2. 開催場所:虎ノ門ヒルズ森タワー9階 会議室TOKYO
3. 出席者:

### <文化・教育委員>(五十音順)

青柳正規委員長、秋元雄史委員、池坊専好委員、市川海老蔵委員、今中博之委員、  
今村 久美委員、小山久美委員、織作峰子委員、絹谷幸二委員、コシノジュンコ委員、  
真田久委員、篠田信子委員、杉野学委員、銭谷眞美委員、田中稔三委員、深澤晶久委員、  
吉本光宏委員

### <臨時委員>

諸戸修二内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局企画・推進統括官、  
坪田知広文化庁参事官(芸術文化担当)、藤江陽子スポーツ庁審議官、  
山谷裕幸外務省大臣官房文化交流・海外広報課長、  
武市玲子東京都生活文化局次長、古川浩二東京都教育庁教育政策担当部長

### <オブザーバー>

野老朝雄氏

### <組織委員会>

遠藤利明会長代行、古宮副事務総長、布村副事務総長、伊藤企画財務局長、  
小林広報局長、筒井アクション&レガシー担当部長(文化担当)、  
中安アクション&レガシー担当部長(教育・文化担当)

## 4. 次第

### 【議題】

1. 東京2020 NIPPONフェスティバル主催プログラム進捗報告
2. 東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラム進捗報告
3. 東京2020 NIPPONフェスティバルムービングマーク進捗報告
4. 東京2020 NIPPONフェスティバルキャッチフレーズ審議
5. 東京2020 NIPPONフェスティバルの検討体制
6. 東京2020教育プログラム「よい、ドン！」の現状報告と今後の取組予定
7. 東京2020組織委員会 活動報告(2018年度)

## 5. 配布資料

資料1:文化・教育委員会 委員名簿

資料2:東京2020 NIPPONフェスティバル主催プログラム検討状況について

資料3:東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラム検討状況について

資料4:東京2020 NIPPONフェスティバルムービングマーク進捗報告について

資料5:東京2020 NIPPONフェスティバルキャッチフレーズ審議について

資料6:東京2020 NIPPONフェスティバルの検討体制について

資料7:東京2020教育プログラム「ようい、ドン！」の現状報告と今後の取組予定

資料8:東京2020組織委員会 活動報告(2018年度)

※資料2～6は机上配布のみ

○古宮副事務総長 皆さん、おはようございます。本日は御多用の中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

ちょっと音が大きいかな。大丈夫ですか。若干大きいような気がしますけど。

ただいまより、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、第7回の文化・教育委員会を開催いたします。

私は、冒頭の進行を務めさせていただきます、組織委員会の副事務総長を務めております古宮でございます。よろしくお願いいたします。

冒頭、本日の委員会のメディアへの公開についてお知らせをいたします。

本日の議事の内容については、調整事項、いろんなマターが多々ございますので、この会議の冒頭のみオープンとさせていただきたいと思っております。

それでは、まず開会に当たりまして、遠藤会長代行から一言御挨拶をお願いいたします。

○遠藤会長代行 皆さん、おはようございます。早朝から、大変ありがとうございました。

もう7回目ということですから、これまでいろんな議論をされた上で、一つ一つしっかりと歩みを進めてこられたこと、感謝を申し上げたいと思っております。

私は、実は今日初めてこの委員会に、青柳先生に怒られそうな気がします、若干冗談ぽく言いますと、昔、文科副大臣のときに、池坊さんのお母さんが文化担当で、私はスポーツ担当だったものですから、場違いな分野かなと思って今日まで遠慮しておりましたが、ということは冗談ではありますが、こうしてこの文化というのはオリンピック、大変大事な課題でありますし、かつてオリンピック大臣をしておりましたときにイギリスに行って最初に言われたのは、文化プログラムに3,700万人の人が参加したと。文化プログラムをしっかりやらないとオリンピック・パラリンピック成功しませんよということが一つと、もう一つは、パラリンピックをしっかりやりなさいというふうなことでありました。

レガシーとして大変大事な課題でありますし、これから聖火リレーが始まり、また、政府、東京都、あるいは自治体、各皆様方が連携して日本の文化、芸術の力を国内外に発信する東京2020 NIPPON フェスティバル、これを全国展開をいたしますので、そうした意味でも皆さん方からお力添えいただいて、まさに文化のオリンピック・パラリンピックにさせていただきたいと思っております。

また、教育につきましても、東京2020教育プログラム「ようい、ドン！」を全国で展開をしており、いろんな学校から協力をいただいておりますが、何よりもマスコット、小学生の皆さんに投票で決めていただいた。これはIOCの皆さん方も大変好評でありますし、そうした取組も皆さん方からのいろんな御意見のもとでできたものだと思っております。

オリンピックまであと493日、そして、パラリンピックまであと525日と、もう一つ一つ決めていかなきゃ

なりません、そういう意味でも今日、皆さん方から御意見をいただいて、そして青柳先生のリーダーシップのもとにしっかりとした議論の中で進めていただきたいと思います。

どうか、皆さん方からのなお一層のお力添えを改めてお願い申し上げまして、お礼を兼ねて御挨拶にさせていただきます。どうもありがとうございました。

○古宮副事務総長 遠藤会長代行、ありがとうございました。

続きまして、本委員会の委員長でいらっしゃいます、東京大学名誉教授の青柳正規先生から、一言御挨拶をお願いいたします。

○青柳委員長 どうも、青柳でございます。

今日は、まず最初に東京2020 NIPPONフェスティバルについて御議論いただいて、その後、今、遠藤会長代行からもお話あったように「よい、ドン!」、これは会長自身が思いつかれた言葉ですけれども、この教育プログラムについて、いろいろ御議論いただきたいと思います。

そして、フェスティバルにつきましては、昨年7月にフェスティバルマークを発表した後、組織委員会が主催する四つのプログラム、主催プログラムですけれども、この全国展開の方策についてお諮り申し上げて、御意見をいただきたいと思います。

それから、9月のワーキンググループで議論を続けさせていただいた後、事務局においてこれまで検討してきましたので、そのことを御紹介申し上げて、やはり御意見をいただきたいと思います。

今日は、これまでの議論を踏まえて、4月上旬に予定している500日前の制作発表について公表する予定ですので、四つの主催プログラムやフェスティバルのキャッチフレーズ等について御意見を頂戴したいと思います。

それから、教育プログラムにつきましては、オリンピック・パラリンピック教育実施校、「よい、ドン! スクール」が前回の御報告から約5,000校増加するなど、大変順調に組織が広がって、取組が広がっておりますので、そのことを御紹介申し上げ、そして、学校で活用していただいている指導案等の制作や小学生に選ばれた東京2020マスコットの全国の学校への派遣など、教育及び機運醸成の観点から多くの子どもたちが関わることのできる取組に工夫を進めております。

本日は、進捗の状況を報告していただき、今後さらに多くの子どもたちが東京大会に関わることができるよう、いろいろアイデアをいただきたいと思います。

いよいよ本番まで500日を切った段階で、ぜひぜひ忌憚のない御意見をお願いしたいと思います。

それから、最後に、今、遠藤代行がおっしゃった、ロンドンでは3,700数万人というのですが、浅草寺だけでも年間3,250万の訪問者がいます。ですから、それを何倍かするような方向までもっていきたいと思いますので、どうぞ皆様よろしく願いいたします。

○古宮副事務総長 青柳委員長、ありがとうございました。

それでは、引き続き、ここから先の議事の進行を青柳委員長にお願いしたいと思いますので、よろしくをお願いします。

○青柳委員長 それでは、議事に入る前に、委員の皆様は、もう既に御承知のことと思いますけれども、文化・教育委員会として、大会の成功に向けて大変尽力して下さっておりました東京藝術大学副学長の松下功委員が、昨年9月16日に御逝去なさいました。

これまで、東京大会の盛り上げや関連事業の展開に大変熱心に御助言をいただき、また取り組んでいただきました。そこで、皆様と御一緒に松下功委員に対して黙禱をささげたいと思いますので、よろしく願いいたします。

黙禱。

(黙禱)

○青柳委員長 ありがとうございます。

では、本日の出席者でございますけれども、フェスティバルマークの制作をお願いしております、エンブレムデザイナーの野老朝雄様に御出席いただいております。

それから、委員の方々の御紹介は配布している資料1をもってかえさせていただきたいと思います。

また、臨時委員として、政府からは、内閣官房、外務省、それから文化庁、スポーツ庁、東京都生活文化局、教育長より臨時委員に御出席いただいております。

では、ここでプレス関係者が退席いたしますので、少々お待ちください。

(プレス 退室)

○青柳委員長 それでは、議題の1に入らせていただきますが、ここからは事務局ですか。

○筒井部長 それでは、NIPPONフェスティバル主催プログラムの進捗報告について、事務局から御説明を申し上げます。

まず、お手元の資料の取り扱いからなんです、緑色のファイルにとじてあります資料につきましては、フェスティバルの企画内容、未発表のものが含まれておりますので、申し訳ございませんが、委員会の終了後に回収ということをお願いいたします。

また、本議題の内容につきましては、本日の議論を経て4月4日の制作発表で公表する予定でございますので、それまで対外秘ということをお願いいたします。

それでは、資料に則して説明をさせていただきます。

(非公開)

説明は以上です。

○青柳委員長 ありがとうございました。

それでは、今お聞きになった説明に関しまして、もうちょっとこうしたほうがいいんじゃないかとか、御感想と、何でも結構ですので、御発言お願いいたしたいと思います。

(非公開)

○青柳委員長 ありがとうございます。

それでは、委員の皆様方からの御議論はまだ尽きないと思いますが、次に移らせていただきます。

NIPPONフェスティバルの共催プログラムの進捗状況につきまして、説明いただきます。よろしくお願います。

○筒井部長 それでは、共催プログラムにつきまして御説明をさせていただきます。

(非公開)

共催プログラムについては以上でございます。

○青柳委員長 ありがとうございます。

この共催プログラムについて、何か御意見ございますでしょうか。

(非公開)

○青柳委員長 それでは、この件は走りながら少し考えるということで、また次回にいろいろ御報告させていただきますし、それから御意見をいただきたいと思います。

それでは、次の議題に移らせていただきまして、NIPPONフェスティバルムービングマークの進捗報告について、事務局のほうからよろしくお願いたします。

○筒井部長 それでは、続いて資料4を御覧いただきたいと思います。

(非公開)

○青柳委員長 どうも、ありがとうございます。

今のムービングロゴに関して、何かございますでしょうか。

(非公開)

○青柳委員長 ありがとうございます。

(非公開)

それでは、次の第4番目の議題に入りたいと思います。

(非公開)

○青柳委員長 どうもありがとうございました。

それでは次に、教育プログラムのほうに入るわけですね。よろしく申し上げます。

○中安部長 それでは、お時間も限られてまいりましたので、簡潔に御説明をさせていただければと思います。

お手元に紙のファイルが別途配付されておりますでしょうか。緑のファイルではなくて、紙をお配りさせていただいております。表紙に、東京2020教育プログラム「ようい、ドン！」の現状報告と今後の取組予定と書かせていただいている紙でございます。

そちらの1ページ目に、本日の議題というものを書かせていただいておりますけれども、大きく分けまして、1、2、3、4と書いてある辺りが、私どもFAと言っておりますが、教育プログラムとして、このオリンピック・パラリンピックの機会にどういうことを、各学校等においてやっていただきたいかということの、一つ筋道を立てるものでございます。

また、私どもの教育FAというのは必ずしも大きいFAでもないので、いろんなFA、関係の部署と協力をしながら、いろんなプログラムを、ある意味ファシリティとして実行していきたいというふうに思っております。その辺りのことを6番、7番という辺りに書かせていただいております。

それでは、2ページを御覧いただければと思います。

ようい、ドン！スクール：認証校数ということで、現在1万7,391校に参加をいただいております。前の、この文化・教育委員会のときに、1校しかないという県が幾つもあったんですけども、文科省の御協力等もいただきながら、さまざまな機会に御説明をさせていただいて、現在、三重県とか和歌山県とか島根県とか大分県にも、御参加いただけるような形になりました。今、宮崎県もたくさん御参加いただける形になっていきますので、関係都県である山梨県においても、またさらに御協力いただけるよう周知を進めていきたいというふうに思っております。

4ページを御覧ください。さまざまな教材をつくらせていただいておりますけれども、このままでは学校では使いにくいというお話をこの文化・教育委員会でいただいたことがございました。本日もいらっしやいます真田先生の御協力もいただきながら、指導案等の作成も進めて、少しでも御参加いただきやす

いような形で進めてございます。

それから、7ページを御覧ください。マスコットの学校への派遣でございます。前回のこの文化・教育委員会のときに委員からいただいた御意見の中に、アスリートであるとか、マスコットが直接来るといふことは、子どもたちにとっていい経験になるので、そういった機会をつくってほしいという御要望を賜りましたので、我々もちょっと限られた予算なので、全国の学校に派遣したいんですけども、なかなかそこまで行けませんので、前回の投票のときに約1万6,000校、御参加いただいたんですが、2,020番目に投票してくれたとか、4,040番目に投票してくれたとか、2,020ごとに、たまたまそういう数字だったところに、ちょっと限られた予算でありますけれども、派遣をさせていただいたという実績でございます。

それから、11ページを御覧ください。学校というのも年度、都度カリキュラムが決まっています、あらかじめ、どういうことが予定されているのかということを目に言ってもらわないと対応できないという御意見をこの場で頂戴いたしました。これはもう1月にスポーツ庁さんの御協力を得て、全国の学校に御周知を申し上げておりますけれども、今年度は、そこに記載のような内容の取組を進めてまいりますということをお伝えしておるところでございます。

代表的なものとして、一つ御紹介申し上げますと、13ページでございますけれども、「みんなのスポーツフェスティバル(春)」ということでございまして、運動会、体育祭で特徴的な取組をいただいたところから、その状況を御報告いただいて表彰をして、ささやかながら記念品等を差し上げたいというふうに思っております。

それから、14ページ以降が、これは、教育はファシリテートしている取組でありまして、ただ、オリンピック・パラリンピックのせつかくの機会ということで、子どもたちにいろんな経験をしてもらいたいというふうに思うことから、組織委員会として進めている事業でございます。

一つ目の、14ページの内容は、学校連携観戦チケットということで、企画内容という青い四角の一番最後の行に書いてございますけれども、オリンピック・パラリンピック合わせて100万人以上の規模で子どもたちを御招待というか、チケットは買っていただくんですけども、御招待したいというふうに思っております。

また、これは詰めて考えると、暑さが結構問題であって、その辺りどうしていけるかということを目に詰めておるところでございます。

それから、15ページでございますけれども、子どもの大会運営等への参加ということでございまして、一言で言いますと、一番下の行でございますが、競技のサポート、あるいはエスコートキッズ等ということがありますけれども、そういったところでも、できる限り子どもたちに御参加いただけるように、現在詰めて行っておるところでございます。



また、16ページでございます。これはさまざまな、我々のほうのパートナー様からいろんな御提案をいただいて、一緒に進めさせていただいているものでございます。パラリンピック委員会とやっております「絵画・作文コンクール」。あと、「はがきでコミュニケーション全国発表大会」は日本郵便さんと。競技体験プロジェクト「東京2020 Let's 55」と、これはオリンピックが33競技、パラリンピックが22競技でございますので、足して55だからゴーゴーと言っているということでございますけれども、記載のパートナー様と。また、このほか英語教員派遣事業などもやらせていただいております。

こうしたことを取り組みながら、17ページにありますけれども、まだちょっと実はここに記載できていないものもあるんですが、大会本番に向けてさまざまな取組を進めていきたいと思っております。

以上でございます。

○青柳委員長 ありがとうございます。

以上のような進捗状況でございますけれども、この教育に関しまして、よろしく申し上げます。

○深澤委員 ここまでの内容とは直接関係はないと思いますが、是非、お願いしたいことがあります。大学連携協定というのが2014年に結ばれて、本日ご報告いただいた活動より先に走りだしたと思えますが、文化・教育委員会、回を重ねるごとにだんだん大学という言葉が減って行って、今回の資料では、もう大学という言葉すらどこかへ消えてしまったんですね。

もちろん、小・中・高、大事です。この内容についても全然問題ないですが、本番まであと1年ですから、大学連携あるいは大学生がどう関わるのか、ぜひ検討いただければありがたいと思っておりますので、それだけぜひお願いしたいと思っております。

○中安部長 ありがとうございます。

これは、全くつまらない話ですみません。ちょっとだんだん組織も大きくなってきておりまして、大学の所管の部署が違うところだったりするものですから、こういう資料から抜け落ちたりしておりまして、誠に申し訳ございません。

それで、大学の関係で申しますと、一番大きいのはボランティアの参加でございまして、御応募いただいたのが大体20万人の方から、ボランティアから御応募いただいたんですが、そのうち10代、大会時に大学生であろう方々からの御応募も数多くありました。そういった方々に積極的に御参加いただく形で、一緒になって大会に向かって進んでいきたいというふうに考えてございます。

以上です。

○青柳委員長 ほかに何かございますでしょうか。

どうぞ。

○市川委員 僕が勉強不足なんですけども、参加するというのが、もうちょっと簡単にアクセスする方

法とかいうものもあるんですか。ちょっとやっぱり、いろんな段取りが必要じゃないですか。もちろん必要なんですけど。この期間の中で、より増やすべきなのか、現状維持がいいのか、逆に多いから減らしたほうがいいのか、ちょっとわからないんですけれども。より多くの人たちが参加するのに、やっぱりちょっとまだ難しいのかなという。

やっぱりどうしても、簡単にどうすりゃいいのという質問のほうが耳にするんですよ。だから、そこら辺はどうなっているのでしょうか。

○中安部長 一つ、裾野広く、幅広く御参加いただきたいなと思っているのは、学校の関係で申し上げますと、学校連携観戦チケットの話でございます。ここに記載したのは100万枚超ということでございますけれども、そのぐらいの割合を学校に向けて出して行って、幅広くというふうに思っております。

あとは、実際には聖火リレーでございますとか、そういったときには沿道観戦なんかは、ぜひ学校と一緒にやりたいというふうに思っています。例えば、手旗をこうやって振るとか、そういうことも含めて、ある程度、学校のほうで簡単に御準備いただけるようなものを御提供しながら、一緒になってやれたらなと思っております。

○市川委員 例えば、やっぱり学校中心の中でということなんですね。

○中安部長 そうですね。私どもが手が伸ばしやすいのがそこからということでもありますので、御協力いただきながらと。

○市川委員 そうですよ。はい、わかりました。

○今村委員 もともと、この「ようい、ドン！」はロンドンのときの18万人のさまざまな市民の方々のチャレンジがオリンピック・パラリンピックまでにたくさん起きた、「Get Set」でしたっけ、というコンセプトに対する日本のコンセプトが「ようい、ドン！」ということで、私が参加した文化・教育委員会のときには既に決定した状態でおりにてきたと思うので意見は言えなかったんですけれど、そのコンセプトがロンドンのときのような盛り上がりになっていると、やっぱり思えなくて。

学校では確かにアクセスできる機会がある子もいるのかもしれないんですけど、もっと個々の市民の方々がそこに参加していくような、そういうものではないなと。教育は別に学校だけがやっていることではなくて、社会教育の団体も、文化を担っている団体が果たしている教育の役割もあるので。何かもっと一般の方々がこのコンセプトに集まり、ちょっと「ようい、ドン！」に集まるかどうかはわからないんですけど、何かもっと、とても距離が遠いということが、あのときに語った2年前の夢が、何かちょっとしぼんできたような気がして、そこ残念に思っているんですが。あとまだ時間があるので、もっともっとできることがないかなと思いました。

○青柳委員長 何かありますか。

○伊藤CFO すみません。若干補足をさせていただきます。

ただいま御説明をさせていただいたのは、まさに学校対象の「よい、ドン！」という形でございまして、それ以外の幅広い、本当にさまざまな活動については、ちょっとこの後、実は概数だけで御報告をさせていただきますと、いわゆる参画プログラムという観点で、全国さまざまな取組を今お声がけをさせていただいて、それに呼応する形で、かなり全国でいろんな草の根の活動も広げていただいております。

これは、実はこの3月の時点で9万4,600件、約10万件の活動が私どもに登録をいただいているような状況でございます。もちろん、これからさらにもっともっとという感じで思っております。ロンドンの場合は、どうしてもやっぱり終わる直前というか、大会が終わったところでの盛り上がりで評価をされるんですが、1年前、もしくは1年半前の今の時点で、ロンドンと東京を比べると、今の段階では、実は東京のほうが盛り上がりやすいような段階だと思っておりますが、この後、量だけではなく質も含めて最終的には全体にロンドンを凌駕して、東京すごいなと思えるように、またさまざまな工夫をしてみたいと思っておりますので。今日もまた、さまざまな御意見を引き続き頂戴できればというふうに思っております。

○青柳委員長 ありがとうございます。

それでは、そういう2018年度にどういうことをやっていたのかということも、ぜひ委員の方々にわかっていたきたいので、次の議題の2018年の活動報告に移らせていただいて、それでまた御意見をいただきたいと思っております。

それでは、2018年の活動報告、よろしく願いいたします。

○筒井部長 大分、時間も押してきておりますので、なるべく短目にといいことできたいと思っております。

活動報告は、2018年度の活動報告についてということで、2枚おめくりいただきますと、10個の項目が挙がっております。こちらについては、後ほど御覧をいただきまして、何かございましたら事務局に問い合わせ、御意見等をいただければというふうに思っております。

今、22ページまでちょっと飛んでいただいて、こちらは参画プログラムと、今、話題に上がったものでございます。参画プログラムに関しましては、2016年のリオ大会の直後に開始して、1年前まで、まだまだ東京中心といった感じだったんですけれども、現在はこの地図にあるように全国的に広がってきたと、範囲がかなり広がってきたというところでございます。先ほどお話しいたしましたように、3月時点では全国で9万4,600件と、関わっていただいた方の数は約6,700万人ということで、大分広がってきたのかなと思っております。

今後もこの取組を各地で進めていただけるように、さまざまな形でPRを図っていきたいというふうに思っています。

23ページ～26ページまでのところが、象徴的な事例ということで挙げさせていただいているものですが、国や東京都ですね、文化庁、東京都におかれましては、積極的に本プログラムに御参画をいただくなど多大な御協力をいただいているところでございます。

また、25ページ、26ページに例が挙がってございますけれども、民間企業におかれましては、独自の強みを生かしながら、さまざまなプログラムに取り組んでいただいているところでございます。

続いて、最後にアクション&レガシー ファイナルレポートというところがございます。そこにスケジュール表がございまして、私どもは、委員の皆様のお知恵をおかりしながら、アクション&レガシープランというものを年々策定をいたしてございまして、それに基づいてさまざまな取組を進めているところでございます。最終的には、この図にあるように、大会後にアクション&レガシー ファイナルレポートということで取りまとめて、成果を世の中に発信していきたいというふうに考えてございます。

最後はそこになるのですが、そこに至るまでの作成過程に当たりましては、皆様方から御意見をいただきながら、まとめていきたいというふうに考えてございます。

最後にあるのは、ファイナルレポートの大体、構成、今のところ考えている構成でございまして、文化・教育というのが第四章というところに入っております。私どもが2020年大会の流れの中で、先ほどのNIPPONフェスティバル、あるいは参画プログラムを通して、何を残せたのか、どんな取組をしてこれたのかといったようなものをまとめて、しっかりと発信していきたいというふうに考えてございます。具体的なところは、これからまた御相談しながら進めさせていただければというふうに思っております。

それと、もう1点だけなんですけど、先ほど、この緑のファイルの一番最後にあったと思うんですが、NIPPONフェスティバルの検討体制について、ちょっと口頭で簡単に御報告させていただきたいと思っております。

NIPPONフェスティバルについては、こちらの文化・教育委員会を中心に御議論をいただいているのですが、青柳委員長はじめ秋元委員、今中委員、吉本委員にも御協力をいただいております。

先ほどの主催プログラムについては、企画のコンセプトから具体的な内容まで、非常に御尽力をいただいております。御相談も密にさせていただきながら進めてきたところでございます。今後も、青柳先生をはじめとする4人の先生方は、NIPPONフェスティバルの統括チームというような位置づけをさせていただいて、引き続き御協力を賜ればなというふうに事務局としては考えているところでございます。

以上、1点御報告でございます。

○青柳委員長 ありがとうございます。

2018年の活動状況があって、そういうものと教育プログラムというものを総合的に、ぜひお考えいただきたいと思います。

それでは、そろそろ時間にもなりましたので、最後に何か御意見がある方。

どうぞ。

○篠田委員 私、北海道から来ているんですけども、こういうプログラムをここに参加して、いろいろ伺っているのとでもわかるんですけども、私も北海道のほうといろいろこのプログラムに関して話をするんですけども、なかなか北海道というのは広くて。実は北海道のへそ、富良野に住んでいるんですけども、この間、根室まで出張しましたら、11時間かかりました、JRで。といいますと、そのぐらい広い道内の中で、この教育プログラムに参加したいという学校その他があるんですけども、どうやって参加していいか。道のほうでは、道が必ず関わって受け入れなければならないと言うんですけども。

ですから、そういうことを、こういう広い地域に住んでいるところには、ぜひ、北海道なり圏内にきちんと伝えていただいて、北海道は支庁……、支庁と今言いませんが、そういうところへきちんとそういう情報を伝えていただくような方法を、ぜひとっていただきたいと思います。

なかなか伝わっていない。何かしたいのに、何をしてもいいかわからない。沿道の旗振りも多分、北海道は道南だけです、聖火ランナーが走るのは。ですから、もうほとんど80%、90%はその沿道の旗振りもできないような地域。でも、日本全国でやはり盛り上がりたいという思いはありますので、ぜひそちらのほうの県、道のほうへの御指導もお願いしたいなと思います。すみません。

○青柳委員長 ありがとうございます。

ぜひぜひ全国津々浦々、あるいは、北海道津々浦々に届くようにしたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、あとは事務のほうから報告いただきますけれども、その前に遠藤先生からちょっと最後に。

○遠藤会長代行 大変ありがとうございました。

2時間びっちり議論される委員会というのは、そうなかなかないのかなと。実は、昨年11月にIOCのバッハ会長がおいでになったときに、これまでの組織委員会でこんなに準備がうまくいっているのは初めてだと、大変お褒めをいただきました。そういう意味では、順調に進んでいると思いますが、まだまだ課題が数多くありますし、その中でも先ほど来、アクセスがどうだとか、北海道はなかなか通じないとありましたが、東京オリンピック・パラリンピックではありますが、日本全体のオリンピック・パラリンピックですから、どうやって多くの皆さん方に参加していただくと。スポーツだけではなくて、こうした文化・芸術、場合によっては先進技術もありますが、そうしたものを含めて日本全体がまさにSparkするんだと、そんな

形を、ぜひ皆さんにおつくりいただきたいなと思っております。

特に、アクセスの仕方について、まだまだどうしても我々事務的になりがちですから、自治体とか、あるいは市町村長会等には話をするんですが、実は多分、そこから先はあまり行っていない部分も数多くあると思います。それにも、こうした文化プログラムの皆さん方の中で、それが直接響いて、そして、それに参加していただくという形にしていいただければ大変ありがたいと思いますので、なお、どうぞよろしく願いいたします。

今日は、大変どうもありがとうございました。

○古宮副事務総長 ありがとうございます。

本日、本当にたくさんの御意見をいつもと同じようにいただきまして、ありがとうございます。

東京2020 NIPPONフェスティバルでございますけれども、本日の皆様の御意見を踏まえまして、組織委員会の主催事業をつくり上げていくということで、今、4月4日に予定をしておりますけれども、ここで初めてといいますか、制作発表をさせていただきたいと思っております。それに向けて準備をしまいたいと思います。

それから、教育プログラムにつきましては、より多くの若い人たちが東京大会に関わることができるような取組ということを推進してまいりたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

委員の皆様には、適宜もちろんこの後の議論といいますか、進捗を御報告させていただきますので、よろしく申し上げます。御了承ください。

それでは、最後に事務局のほうから事務連絡がございますので、よろしく申し上げます。

○筒井部長 事務連絡をさせていただきます。

委員会冒頭に申し上げましたとおり、お手元の緑のファイルにつきましては未公表情報が含まれておりますので、申し訳ございませんが回収とさせていただきます。机上に残しておいていただければと思います。

本日御議論いただいた内容の取り扱いですが、4月4日に制作発表がございますので、制作発表をするといったものは大事なもののなので、それまでは秘匿で、秘密ということをお願いしたいと思います。

なお、議事概要をこの後、組織委員会のホームページで公開をさせていただきますので、御了承いただくようお願いいたします。

次回の委員会については、また別途御連絡をさせていただきます。

本日、この後プレスのブリーフィングが予定されておりますけれども、そちらは青柳先生と事務局で対応をさせていただきます。よろしく申し上げます。

今日は、どうもありがとうございました。